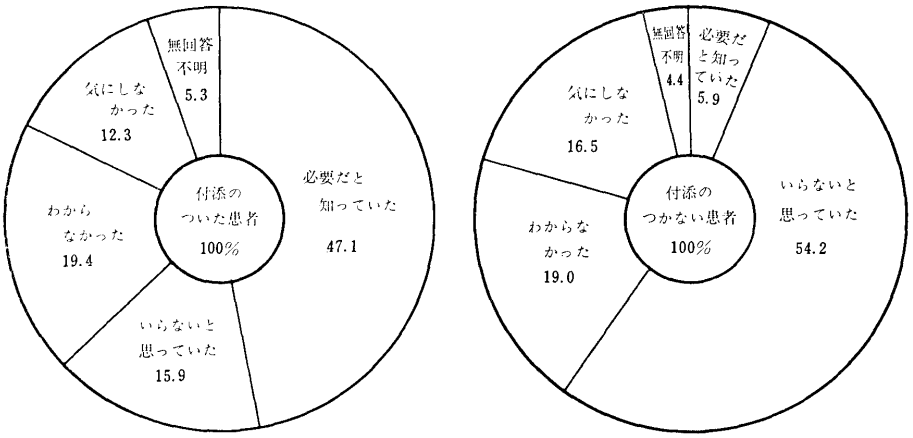
図10　付添有無別入院前付添が必要かどうか知っていたか



Ⅳ　看護婦に対する期待と不満

1　看護婦，付添の業務

本項では，看護職が行なう看護行為として一般的に合意されている行為をとりあげ，それが実際に誰が行なっているのか，また患者は誰によって行なわれることを期待しているのかどうかを，特に看護婦と付添に焦点をあててまとめた。

調査票では8つの看護行為について，それぞれ，「実際に行なっていた人」「あなたがしてほしいと望む人」を9つの選択肢の中から選んでもらった。集計の際考慮したことは，ここであげた看護行為は必ずしも患者全員に必要であるものではないので，実施者の現状では，その看護行為が患者本人以外の誰かによって行なわれた場合，また期待する実施者では，誰かによって行なってほしいという回答を得た場合だけについて集計した。ただし「検温・検脈」だけは，すべての患者に意味のある看護業務であると思われるので，「無回答・不明」以外の回答は，すべて集計の対象とした。

また，看護行為の実施者も，期待する実施者も，患者に付添がついていたか，いないかによってその様相が異なっていたので，付添の有無別にみた。その結果が図14である。aは，その看護行為を行なっている人の現状，bは患者が行なってほしいと思う人である。

1)　検温・検脈<図11—①>

a　実施者

付添がついていない場合はもちろん，付添がついていても，ほとんど看護職が行なっていた。しかしながら，付添が行なっていた場合も6.3％あった。

b　期待する人

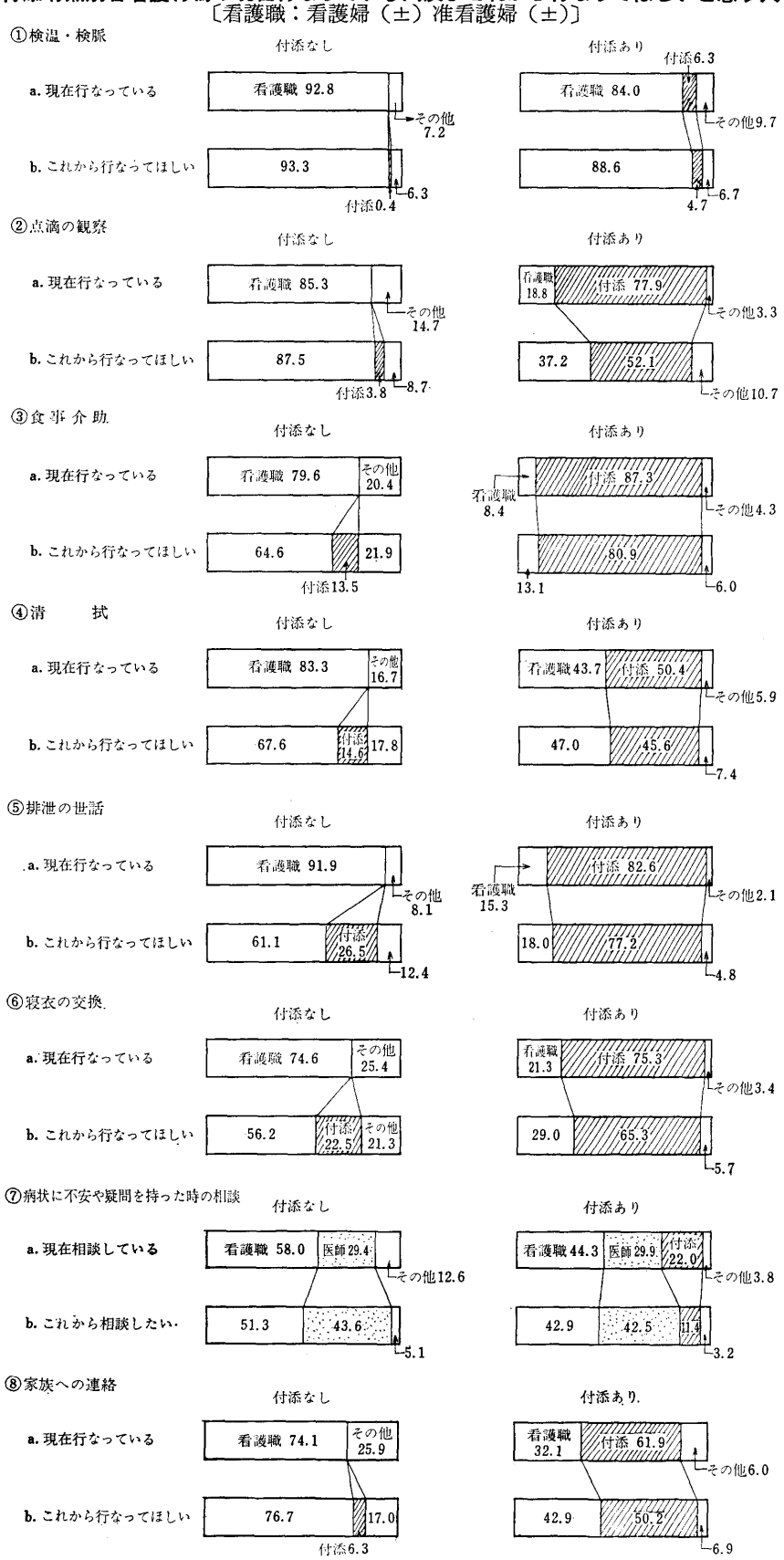
付添の有無にかかわらず，大部分が看護職に期待している。現在の実施者と比べると若干看護職に期待する割合が高くなっていることがわかる。

2)　点滴の観察<図11—②>

a　実施者

「付添なしの患者」には，圧倒的に看護職が行なっている割合が高かった。一方，「付添ありの患者」で，点滴の観察を看護職が行なっている割合は2割弱にとどまり，大部分は付添が行なって

図11　付添有無別各看護行為の現在行なっている人及びこれから行なってほしいと思う人（%）
〔看護職：看護婦（±）准看護婦（±）〕



いた。

b　期待する人

付添がついていない場合では，現状の実施者の割合と同様，ほとんどが看護職に期待している。「付添ありの患者」をみると，看護職に期待する割合が4割弱であるが，現在行なっている看護職の割合よりも期待が高くなっていることがわかる。

3）食事介助<図11—③>

a　実施者

「付添なしの患者」の場合であると，ほとんど看護職が行なっており，逆に付添がつくとほとんど付添が行なっていた。

b　期待する人

「付添なしの患者」では，やはり看護職に期待する割合が圧倒的に多いものの，付添に行なってほしいという回答が13.5%あった。付添がついている場合，付添に期待する割合が8割と依然高い。

4）清拭<図11—④>

a　実施者

付添がついていない患者には，看護職が実施していることが断然多く80%以上であったが，付添がついていた場合，約半数が付添の手によって行なわれていた。

b　期待する人

付添がいない場合でも14.6%が付添に行なってもらうことを願っているが，残りの大多数は看護職に期待している。付添がついていると，看護職と付添とでほぼ二分した期待があらわれる。現状の実施者の構成比とだいたい同じである。

5）排泄の世話<図11—⑤>

a　実施者

付添がついていない患者には看護職が，また付添がついている患者には付添が行なっていたと言いきることができる。

b　期待する人

付添がつかなかった患者でも，付添に行なってほしいという回答が26.5%と多いことが目立つ。しかし，付添がついていた患者をみると，付添に期待している人が，現在付添が実施している割合に比べ，多少減じている。

6）寝衣の交換<図11—⑥>

a　実施者

「付添なしの患者」では看護職が約75%，逆に，「付添ありの患者」では付添が75%行なっている。

b　期待する人

「排泄の世話」と同様この行為でも付添がついていない患者に，付添に期待したいという回答が22.5%あった。「付添ありの患者」では，現在の実施者の構成比にほぼ一致した回答がえられた。

7）病状に不安や疑問を持った時の相談者<図11—⑦>

a　現在，相談に対応している人

看護職に相談していると答えている人は，「付添なしの患者」で60%弱，「付添ありの患者」であると多少下がり約45%であった。付添者に相談している患者も約2割いることがわかる。また，付添の有無にかかわらず約3割の患者が医師と答えていた。

b　これから相談したいと思う人

付添の有無を問わず，大すじは現在相談している人にこれからも相談をもちかけたいと思っているようだ。しかしながら，やはり治療者である医師に直接聞きたいという人が現在相談している割合よりも増え，43%前後であった。

8）家族への連絡<図11—⑧>

a　実施者

付添がいない場合では，だいたい看護職が行なっているが，付添がついていると，約60%の患者

が付添に何らかの連絡を頼んでいることになる。

b　期待する人

付添がついていないと，やはり看護職に行なってほしいという回答が得られた。付添がついている場合，看護職に行なってほしいという割合は多少，現在の実施者の割合よりも増えているものの，やはり半数が付添によって行なわれることを希望していた。

上記の結果を，特に看護職だけ抜き出し，1つの図にまとめたものが<図12—a><図12—b>である。このように，付添がついているか，ついていないかによって，この看護行為を看護職が実施している割合に大きく影響していることがわかる。また，その看護行為をこれから誰に行なってもらいたいかという患者の期待意識は，現在の実施者に大きく関係していることもわかる。すなわち看護職が実施している看護行為であれば，これからも看護職に期待しやすく，付添など看護職以外の人が行なっていれば，看護職には期待しにくいといえる。このことは看護職にとって重要な示唆を与えてくれる。つまり，その看護が患者にとっていかに意味があり，重要なものであるかを，看護サービスの受け手に認識されるためには，看護職自身が具体的な看護を1つ1つ積み重ねることが重要であるということがいえる。

図12—a　付添有無別
各看護行為を看護職が行なっている割合（%）

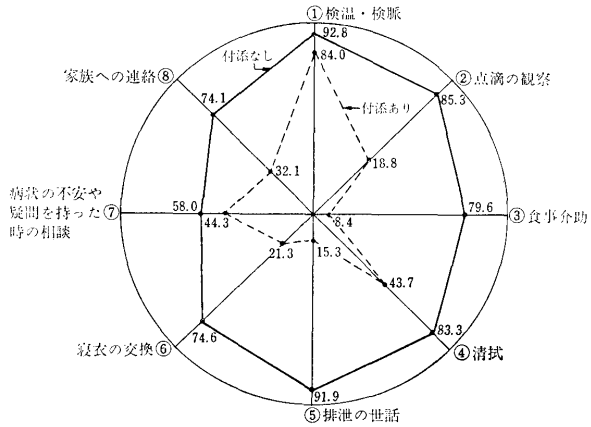
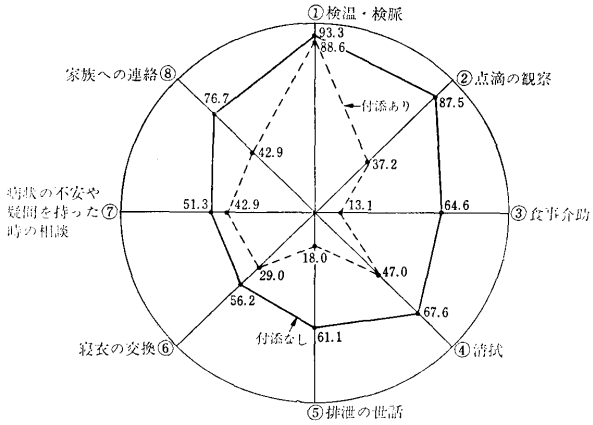


図12—b　付添有無別
各看護行為を看護職に行なってほしいという割合



2　看護婦に対する不満

入院中の看護婦に対する印象として，5項目及びその他をあげ，それぞれについて「そう思う」「どちらともいえない」「そう思わない」の選択肢の中から選んでもらった。これは，看護婦に対して，患者がどの程度のマイナスイメージを抱いているかをみようとしたものである。結果は<表11>のとおり，最も多かったのは，「看護婦は忙しすぎる」であり，次いで「患者と接している時間が短い」が多かった。看護婦が多量の業務をこなす中で，患者にとっては看護婦が自分と接する

表11　看護婦に対す不満(%)

意識／不満の内容	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	無回答 不明	計
看護婦は忙しすぎる	62.0	24.1	7.7	6.2	100.0
患者と接している時間が短い	20.8	24.2	48.1	6.9	100.0
説明もしないで検査や処置をする	8.6	14.1	69.5	7.8	100.0
なんとなく看護婦には頼みにくい	6.7	14.0	73.1	6.2	100.0
呼んでもすぐきてくれない	4.2	12.4	76.3	7.1	100.0

時間が短いことをなげき，また客観的にみて看護婦は忙しすぎると思っているようだ。しかし，直接患者に接する医療従事者のうち看護婦を最も身近かな存在とみる患者心理があるからこそ，このような印象となるのであろう。

看護婦に対するその他の印象として，自由に記載してもらった。その内容は，以下にあげるような看護婦の人員不足や，看護婦の人間性の重要さを訴えるものが多かった。

・夜間の人数が少なく，看護婦さんは忙しすぎると思う（40代，女性）

・急患や手術後で，そちらに用事が集中されている時，臨時に看護婦の数を増やすわけにはゆかないのでしょうか（50代，女性）

・点滴がなくなってブザーを押してもすぐ来てくれない時がよくあった。そんな時は不安でイライラする（40代，女性）

・なかなか忙しそうに見えるが，患者の精神状態をもう少し考え，病気の説明もさることながら，対話を多くもつようにしてほしかった（50代，男性）

・一部の看護婦は，きわめて事務的で好感がもてなかった（20代，男性）

・看護婦個人によって，世話のしかたが患者の身になって下さる方と，そうでない方があり問題がある（40代，女性）

・看護婦さんの仕事があまりにも多い様に思いました。もっと専門的な知識を生かした仕事に専念してもらいたい

・もう少し笑顔がほしいと思いました（50代，女性）

・医は仁術というが，看護婦さんもその人間性が大切になると思います。人間教育を十分にしてもらいたい（20代，男性）

・看護婦の病院における実際的な働きは，医師よりもウェイトが重いと思う。科学的にではなく，精神的に与える影響力というものは大変なものだ。実際に治すのは医者ではなく，人間自身の働きにあるからだ（20代，男性）

注）厚生省統計情報部「昭和53年病院報告」：一般病床平均在院日数37日